

『今昔物語集』 仏伝説話の一齣

——「スジャーター」から「ナンダハラ」へ——

鈴木 治子

一、はじめに

仏伝の成道をめぐる印象的な一場面に、釈尊が苦行で衰えた体力を牧牛女の捧げた乳粥（乳糜）で回復させ、菩提樹下の瞑想に入るくだりがある。そして、その乳粥を供養した娘の名は、今日「スジャーター」として広く喧伝されている。ところが、『今昔物語集』をはじめとする我が国の仏伝説話では、「難陀波羅（なんだはら）」の名でこの娘が登場する。

本稿では、パーリ文、梵文、漢訳の諸仏伝および我が国の仏伝文学の中に描かれた乳糜供養説話の諸相をたどり、二つの名が生じた背景と、『今昔物語集』巻第一第五「悉達太子、於山苦行語」の原話を追究することを目的とする。

二、「スジャーター」 伝承のひろがり

法頭がインド巡拝を綴った『法頭伝』の「伽耶城」の場面に次の記述がある。

又北行二里得彌家女奉佛乳糜處。從此北行二里。佛於一大樹下石上東向坐食糜。樹石今悉在。石可廣長六尺高

二尺許。(傍線筆者、以下同じ)

これによると法頭の渡印した五世紀には、牧牛女の乳糜供養の場所、および菩薩がその乳糜を坐して食したところが残っていたという。

また、『大唐西域記』卷第八「摩揭陀国 上」には次のような一節がある。

菩提樹垣外西南牽堵波。奉_レ乳糜_二二牧女故宅_一。其側牽堵波。牧女於_レ此煮_レ糜。次此牽堵波如來受_レ糜處也^③。すなわち、七世紀の玄奘の時代にもこの話は喧伝されたのであろう。この記述から、乳糜を奉った処のみならず、

「二牧女故宅」までが仏跡として扱われていたことが知られる。ただ、これらには牧牛女の名は語られていない。

右の二書に記された牧牛女の伝承はきわめて息が長い。中村元著『ゴータマ・ブッダ I』(一九六九年初版)にも「ネーランジャラー河を渡ったところに、スジャーター女の家跡と称するものがある」と記されているが^④、二〇〇四年三月に筆者が当地を訪れた折も、釈尊成道の地ブダガヤの大塔前にはスジャーターの石像が置かれ、金剛宝座から見て尼連禪河(ネーランジャラー河)の対岸に位置するセーナ村には、現在でもこの話が伝承されていた。土地の人々は伝承を持つばかりでなく、スジャーターの家と称する遺跡を守っていた。しかし、人々が語る名は「スジャーター」だけであつて、「ナンダハラ」の名を知る者はいなかった。

この説話は、多くの經典・仏伝に認められる。本来、仏伝は阿含經典や律藏に断片的に描かれ、やがて伝記をまとめることを本旨とした仏伝經典が登場したとされる。この牧牛女話は、古くは『雜阿含經』卷第二十三に登場する。この經の当該箇所は時間軸にそつて仏伝を記したのではなく、阿育王建立の仏塔を巡りながらそこにゆかりあるのエピソードを描く体裁を取っている。牧牛女話は

此處二女奉_二菩薩乳糜_一如_二偈所說_一

大聖於_二此中_一受_二二女乳糜_一

從_レ此而起去 往_二詣菩提樹_一^⑤

と描かれているが、ここにも女の名は示されていない。

さて、「スジャーター」の名が見られる文献に、まずパアリ語ジャータカ所収の『ニダーナ・カタール』（因縁の物語）がある。その乳糜供養譚は次のように始まる。

そのころ、ウルヴェーラーのセーナーニ聚落に、地主セーナーニーの家に生まれたスジャーターという年ごろの娘がおり、一本のニグロダ樹に祈願をかけた。「もし、わたしが同じ階級の家に〔嫁いで〕行って、最初のおなかに男の子が授かりましたら、毎年十万〔金〕を出してあなたにお供えをいたしましょう」と。かの女はその祈願はかなった。（偉大な人）が難行を行なつて満六年たつたヴィサーカ月の満月の日のことだったが、かの女は供養祭をしようと思ひ立ち、まず千頭の牝牛をラッティマドウカの森に追ひ、その乳を五百頭の牝牛に飲ませた。そして、その（五百頭）の乳を二百五十頭に〔飲ませる〕というふうにして、ついには十六頭の牝牛の乳を八頭の牝牛に飲ませ、乳の濃さと甘さと栄養分とを多くしようとして、（乳の回転）ということを行つた。かの女は、ヴィサーカ月の満月の日に、朝早く、「供養祭をしましょう」と、夜明けとともに起き出し、かの八頭の牝牛の乳をしばらくとした。べつに子牛が牝牛の乳房のしたへ行つたわけではなかったが、乳房のしたに新しい容器を差し入れると、たちまち、ひとりでに乳がほとばしり出てきた。その不思議さを見て、スジャーターは自分の手で乳を取つて新しい容器に入れ、手ずから火をおこして煮はじめた。

このように、詳細をきわめた物語が展開している。右の話に続き、スジャーターは「ミルクがゆ」に「滋養食」を入れ、「黄金の鉢」に盛つてボーデイサッタの手の上に載せる、と語られる。さらに続いて、

ボーデイサッタは坐つていた場所から立ちあがると、木のまわりを右へとまわつて、鉢をたずさえて、ネーランジャラー河の岸辺に行かれた―数千のボーデイサッタたちがさとりをひらかれる日におりて行つて沐浴する場所は、スツパティツティタ沐浴場というのであるが―その岸辺に鉢を置いて、おりて行つて沐浴し、数万の仏たちの衣服である（聖者の標章）を身にまとい、東方に向かつて坐られた。そして、煮つめられた蜜入

りのミルクがゆを、ターラ樹のひとつだねの実ほどの大きさの四十九個の団子にして、残らず食べられた。かれは仏となつて七週間（さとり座）で過ぎされたのであるが、それが、まさしく四十九日の食物なのである。（中略）

ところで、そのミルクがゆを食べおわると、黄金の鉢を手にし、「もし、わたしが今日仏となることができらば、この鉢は流れに逆らつて行け。もし、できないのなら、流れに従つて行け」と言つて投げられた。と乳糜供養話は結ばれる。このように、阿含經典とは異なり、独立した仏伝には成道前話が豊かな物語性を付与され詳細に語られている。

次に梵文の仏伝を見てみよう。律藏から発展したとされる『マハー・ヴァストウ』には、前世に菩薩の母であつたスジャーターがウルヴィルヴァーで乳粥を供養する話が載る。同じく梵文の仏伝である『ラリタ・ヴィスタラ』では、ウルヴィルヴァーのナンディカ村の村長の十人の若い娘が菩薩に奉仕し、その一人スジャーターは

千頭の雌牛から乳を搾り、それから七回繰り返して、最も純粹なクリームを取り出し、ついでこのクリームと最も新鮮な最も新しい米とを、新しい焼物の壺に注ぎ入れ、新しい竈の上に置いて、料理を作つた。（中略）
村長の娘スジャーターは蜂蜜入りの乳粥を黄金の鉢に満たして菩薩に捧げた（中略）。

この賢いスジャーターは食べ物で黄金の器に入れて捧げ、かのボサツの足を頂いて礼拝してから、喜びに満ちてボサツに向かつて言つた。私のためにどうかこの食べ物をお食べください、おお、衆生の御者であられます方よ。

必要なだけこの食べ物を食べられた後で、この賢者は器を水の中に投げ入れられた。^①
とあり、『ニダーナ・カタール』とはまた異なつた伝承を詳細に記している。

次に漢訳經典では、『ラリタ・ヴィスタラ』を原典とする仏伝經典『普曜經』卷第五に「時修舍慢加村落長者女。與諸梵志奉美乳糜。」^②さらに偈の中で「修舍女奉食 金鉢盛乳糜」^③とあり、スジャーターの音写として「修

舎女」の名が用いられている。

また、律にも「須闍陀」の名は登場する。『五分律』卷第十五には、

起到鬱鞞羅羅斯那聚落入村乞食。次到斯那婆羅門舎。於門外默然立。彼女須闍陀。見佛威相殊妙。前取佛鉢盛満美食以奉世尊。佛受食已語前。汝可歸依佛歸依法。即受二自歸。是爲女人中須闍陀最初受二自歸爲優婆夷。佛食已復還菩提樹下。結跏趺坐三昧七日受解脫樂。¹¹⁾

の一節が見える。ただ、ここでは、菩提樹下の成道前の乳糜供養の話ではなく、成道の後七日経て鬱鞞羅羅斯那聚落で世尊が村の娘「須闍陀」より美食を供養され、娘に二自帰を授け優婆夷とさせる話である。

さらに、『マハー・ヴァストゥ』と同系の一異本の訳とされる『仏本行集経』卷第二十四にも「須闍多」の名が登場する。

到一村主長者之家。然其長者。名難提迦^{隋言}至彼家已。却立一面。默然而住。其難提迦。自喜村主有一善女。

名須闍多^{隋言}善生^{善生}彼女端正。可喜無雙。爲諸世人之所樂見。其善生女遙見菩薩手持瓦器默然立住欲乞求食。善生見已。從其二乳。自然汁出。時善生女。問菩薩言。最勝仁者。仁是誰子。是何種姓。名字云何。父母何處。今欲何求。仁者云何。有何神異。今我一見。使我兩乳汁自然流¹²⁾

しかし、この一節も乳糜供養譚ではなく、乞食に訪れた菩薩の姿を見て「須闍多（善生）」の乳より自然に乳汁が流れたという話である。ただここでは、スジャーターの音訳「須闍多」と意訳「善生」の双方を用いていることが注目される。『仏本行集経』では、卷第二十五に「善生村主の二女」による乳糜供養譚が語られているが、これについては次章で言及したい。

また、乳糜供養譚にスジャーターの意識の「善生」の名が現われるのは、『ラリタ・ヴィスタラ』の漢訳で『普曜経』の異訳とされる『方广大莊嚴経』である。

時善生女即以三金鉢盛満乳糜。持以奉獻菩薩受已作是思惟。食此乳糜必定得成阿耨多羅三藐三菩提。

復告「善生」。我若食已如「是金鉢當付與誰」。善生女言。願以此鉢奉「上尊者隨意所用」。

このように、「スジャーター」／須闍多（須闍陀）／善生の名は、「ニダーナ・カタール」をはじめとするパーリ仏伝・梵文仏伝ばかりでなく、漢訳仏伝經典等にも数例認められた。しかも、乳糜供養譚ではなく成道前後の別の説話として「須闍多」の登場する異伝のあることも確認された。

三、「スジャーター」から「ナンダハラ」へ

さて、牧牛女の名称は、前述した「スジャーター」（須闍多）の他に「ナンダハラ（ナンダバラ）」（難陀婆羅）と伝承された例がある。

まず、先述した『ラリタ・ヴィスタラ』では、乳糜供養の主体はスジャーターとするが、共に菩薩への奉仕者として登場するウルヴィルヴァー村の村長の十人の娘の最初に「バラ」の名が出る⁽¹⁸⁾。また、二世紀に馬鳴の著した『ブッダ・チャリタ』には牛飼いの長の娘としてナンダバラが登場し、その漢訳である『仏所行讚』卷第三には時彼山林側 有二牧牛長 長女名「難陀」 淨居天來告 菩薩在林中 汝應往供養 難陀婆羅闍 歡喜到其所 手貫白珂釧 身服青染衣 青白相映發 如水淨沈漫 信心增踊躍 稽首菩薩足 敬奉香乳糜 惟垂哀愍受 菩薩受而食⁽²⁰⁾。

「難陀」および「難陀婆羅闍」と出る。そして代表的な仏伝經典である『過去現在因果經』卷第三には「有二牧牛女人。名「難陀波羅」とある。

この他に、乳糜供養の主人公の女を二人とする伝承もある。まず、『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第二十には「於難陀難陀力二牧牛女所。食十六倍上妙乳糜」と二人の女が登場する。同じく、『仏本行集經』卷第二十五「精進苦行品 第二十九下」には「軍將斯那耶那婆羅門家」の二人の娘として「難陀⁽²¹⁾」「婆羅⁽²²⁾」の名が見える。

ところが、この箇所では乳糜供養譚は語られず、二女が菩薩の身に酥油を塗り、羊乳を供養する話となっている。ただ、これに続く「向菩提樹品 第三十上」には、「善生村主二女」による乳糜供養譚が語られる。²⁴さらに、同經典卷第四十では、成道後の遊行説法の場面にも「兵將大婆羅門」の二女として「難陀」「波羅」の二人の名が見える。²⁵このように、この経には多様な名が登場し、まさに経の集成としての性格を示している。

また、チベット系の仏伝『衆許摩訶帝経』巻第六では、女の名が「難那」「難那末羅」となっている。²⁶この他、本生經典にも「難陀」「難陀波羅」の二女が登場する。『出曜経』巻第十四には、

復次菩薩從苦行起。難陀難陀波羅二女。以蘇麻油塗菩薩身。諸女天身極自柔軟狀如天女。²⁷
とあり、『中本起経』巻上では

梵志二女。長名難陀。次名難陀波羅。見光喜悅。尋詣佛所。禮拜請佛。如來昇堂。教授二女。歸命三尊。授五戒已。²⁸

と、いずれも二人として扱うが、前者は「蘇麻油」を菩薩の身体に塗る話が描かれ、後者は二人が積尊から受戒する話であり、ここにも乳糜供養の話題はない。

一方、「難陀婆（波）羅」の意識である「歡喜」「歡喜力」等の名称を用いている經典もある。『仏本行経』巻第三には

至他閑處。於是便受喜悅喜力二女乳糜甘露之施。即便行詣微妙道樹。

と、「喜悅」「喜力」と意識した名で二女が登場する。また、説一切有部系の『根本説一切有部毘奈耶』³⁰巻第十八では「歡喜」「喜力」の二人が、さらに同『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』³¹巻第一、同巻第八、「根本説一切有部毘奈耶出家事」³²巻第二、「根本説一切有部毘奈耶破僧事」³³巻第五では、「歡喜」「歡喜力」が登場する。中でも、きわめて詳細な仏伝を収めている『破僧事』では、次のようにこの説話が詳述されている。

菩薩爾時。漸加飲食身力強健。即往西那延村唐言會軍村也。彼有村主。名爲軍將。將有二女。一名歡喜。二名歡喜力。時此二女先聞。雪山南傍涼伽河側。劫比羅仙住處不遠。劫比羅城釋迦種中生一太子。端正具足衆相圓滿。一切衆生見者喜悅。相師占云。此兒若紹王位當得轉輪王。此女聞已。於十二年中常守貞潔。人間常法。若有女人。能守貞潔滿十二年者。即合與轉輪王爲妃。故彼二女。於十二年內不犯十惡。滿十二年訖作是思念。我今於十二年中作清淨行訖。應以十六轉乳粥供養苦行仙人。所謂十六轉者。一千牛乳飲一千牛。復以一千飲五百。復以五百飲五百。復以五百飲二百五十。復以二百五十飲二百五十。復以二百五十飲一百二十五。復以一百二十五飲一百二十五。復以一百二十五飲六十四。復以六十四飲六十四。復以六十四飲三十二。復以三十二飲三十二。復以三十二飲十六。復以十六飲十六。復以十六飲八。復以八飲八。復以八飲四。作是念已。即取此乳頗瓊器中煮爲粥。

このようにして煮た上質の乳粥を「歡喜」「歡喜力」の二女は、梵天・淨居天・帝釈天の勧めによつて、体力を消耗した菩薩に施すのである。

當煮之時。淨居諸天。觀見菩薩食此粥已即成菩提道。我等應當助其威力。即將上藥速得力者。置乳器中并衛護之。當時粥現種種輪相。時有一外道。名曰近行。來見此粥有種種相。作是念云。食此粥者必證無上智慧。我應乞取喫之。念已便去。粥既熟已。時彼外道却來告二女曰。我從遠來甚大飢乏。今此乳粥可分施我。二女報曰。我不與汝。默然而去。時二女人。從頗瓊器中。瀉其乳粥於寶鉢中。天帝釋來立二女前。梵天淨居天等以此遙立。時彼二女。既見帝釋在前而立。即捧其乳鉢施與帝釋。帝釋報曰。施勝我者。二女問曰。今誰勝汝。答曰。彼梵天王。爾時二女。復持其乳鉢施梵天王。梵天王報曰。施勝我者。問曰。誰勝於汝。答曰。彼淨居天。時此女人。復以乳鉢捧淨居天。淨居天報曰。施勝我者。又復問曰。誰勝於汝。答曰。彼菩薩今見在尼連禪河洗浴。爲無力故不能得出。彼人勝我。汝當施與。時二女人。即持其乳粥往尼連禪河。將施菩薩。爾時河岸有女樹神。見菩薩虛羸不能上岸。即從樹出半身展手欲接菩薩。菩薩問曰。汝是何身。樹神答曰。我是女人。菩薩報曰。我不能觸

汝。可爲我低一樹枝。我欲攀出。時彼樹神即低樹枝。菩薩攀而得出。便著衣服在於河岸樹下而坐。時二女人便持粥至。曲躬恭敬奉施菩薩。菩薩以自他利故。便受其粥。又便問曰。兼此寶器總能施不。二女答曰。聖者。今總奉施。菩薩爾時即喫其粥。洗其寶鉢擲尼連河中。⁽³⁶⁾

ここでは、釈尊の出自から説き起こし、二女が「十六轉」の乳粥を供養する必然性をはじめ、千頭分の牛の乳を濃縮した「十六轉」の乳の意味を具体的に説明する。続いて「近行」という外道が乳粥の意味を説く。次に、帝釈天・淨居天・梵天が登場し、それらの諸天を超えて勝れた存在である菩薩に乳粥供養を勧める。このように、本經では乳糜供養譚のもつとも増幅した変容が認められる。

有部系の律で広汎な仏伝を描いたのが『破僧事』であるとする、一方、仏伝經典で多様な伝承を詳細に描いているのは、先述した『仏本行集經』である。例えば、ここにも『破僧事』の「十六轉乳粥」と近似した「十六分妙好乳糜」を作る過程が詳述されている。⁽³⁷⁾

以上を整理すると、阿含經典には牧牛女の名は語られないが、『ニダーナ・カター』等のパリー仏伝、『マハー・ヴァストウ』『ラリタ・ヴィスタラ』等の梵文の仏伝では「スジャーター」、その漢訳の『普曜經』には「修舍女」、「五分律」所収の仏伝には乳糜供養でなく食事の供養譚の中に「須闍多」が登場する。また漢訳仏伝には、スジャーターの訳語の「善生」、「善生村主二女」などの表現も見られた。

また、『ラリタ・ヴィスタラ』には、村主の十人の娘の一人として「バラ」が見え、そして『ブツダ・チャリタ』には、初めて「ナンダバラ」の名が登場する。漢訳仏伝ではそれが「難陀婆（波）羅」と表記され、さらに「難陀」「婆羅」の二人として描く例も認められた。加えてその訳語の「歓喜」「歓喜力」など、さまざまな呼称が見られた。

これらの名が、乳糜供養譚でなく、菩薩の成道前後の供養譚に登場する経もあった。そして、『仏本行集經』のように「善生」を女の住む村の名として扱うものや、『四分律』のように「蘇闍羅」を女の父の名として出す例も

あり、きわめて錯雑した伝承過程を示している。

ただ、説一切有部系の律ではとくにこの説話を詳述する傾向があり、例外なく「歓喜」「歓喜力（喜力）」の名で二女を登場させている。

次に、「須闍多」と「難陀婆（波）羅」の先後関係を考えたい。諸々の伝経經典成立の先後関係はいまだに決定しない難しい問題であるが、パーリ文・梵文の伝やその漢訳にある「スジャーター」「須闍多」の呼称が先行すると考えられる。その根拠として、次のような仮説が立てられる。それは、「須闍多」が乳糜を奉る場面、あるいはそれを思い立つ場面で、「歓喜の心」を発すという表現が諸書に見られる点である。たとえば、『ニダーナ・カタ』では、ボーディサッタが供養を受けようとしているという報告を下女から聞いてスジャーターは「喜び満足し」とある。したがって、その「歓喜」の語が固有名詞化し、さらに『ラリタ・ヴィスタラ』に登場する善生村の十人の娘の一人「バラ」の伝承が混入し、娘の名がナンダバラ（歓喜）となる異伝が成立したと推測されよう。

四、『今昔物語集』における乳糜供養譚

我が国に現存する完結した最古の伝は『今昔物語集』天竺部所収の説話群であるが、乳糜供養譚はその巻第一第五話の後半に次のように描かれている。

太子、又迦蘭仙ノ苦行ノ所ニ至給フ。橋陳如等ノ五人ノ栖也。其ヨリ尼連禪河ノ側ニ至給テ、坐禪修習シテ苦行シ給フ。或日ハ一麻ヲ食シ、或日ハ一米ヲ食シ、或ハ一日乃至七日ニ一ノ麻米ヲ食ス。橋陳如等又苦行ヲ修シ、太子ヲ供養シ奉テ其ノ側ヲ不離ズ。太子思懐、「我レ苦行ヲ修シテ既ニ六年ニ満又。未ダ道ヲ不得ズ。若シ此ノ苦行ニ身羸レテ命ヲ亡シテ道ヲ不得ハ、諸ノ外道ハ、餓テ死タルト云ベシ。然レバ、只食ヲ受テ道ヲ可成」ト思シテ、座ヨリ立テ尼連禪河ニ至リ給フ。水ニ入テ洗浴シ給フ。洗浴畢テ身羸レ瘡給テ陸ニ不登得給

ズ。天神来テ、樹ノ枝ニ乗セ奉テ登セ奉リツ。其河ニ大ナル樹有リ、頰離那ト云フ。其ノ樹ニ神有リ、柯俱婆ト名ツク。神、瓔珞莊嚴セル臂ヲ以テ太子ヲ引迎ヘ奉ル。太子樹神ノ手ヲ取テ河ヲ渡給ヌ。太子彼ノ麻米ヲ食給ヒ畢テ、金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ菩提樹ニ向給ヒヌ。

彼ノ林ノ中ニ、老人ノ秣牛ノ女有リ。難陀波羅ト云フ。淨居天来テ勸メテ云ク、「太子此ノ林ノ中ニ来給ヌ。汝子供養シ奉ベシ」ト。女此ヲ聞テ喜ブ。其時ニ、池ノ中ニ自然ラ千葉ノ蓮花生タリ。其ノ上ニ乳ノ麻米有リ。女此ヲ見テ奇特也ト思テ、即チ此ノ麻米ヲ取テ、太子ノ所ニ至テ礼拝シテ此ヲ奉ル。太子女ノ施ヲ受給テ、身ノ光リ・氣力満給ヌ。五人ノ比丘此ヲ見テ驚キ怪テ、「我等ハ此ノ施ヲ受テハ苦行退転シナム」ト云テ、各本所ニ返。太子一人ハ其ヨリ畢波羅樹下ニ趣キ給ヒニケリトナム語り傳ヘタルトヤ。⁽³⁸⁾

この箇所の出典・同話・類話を先学の主要諸註釈は次のように指摘する。

① 日本古典文学大系『今昔物語集』一（山田孝雄 他校注）……『過去現在因果経』卷第三。異伝は『法苑珠林』卷第十一・『経律異相』卷第二。

② 講談社学術文庫『今昔物語集』（二）（国東文麿 訳注）……『過去現在因果経』卷第二・三。『仏祖統記』卷第二。『法苑珠林』卷第十一。『経律異相』卷四。

③ 新日本古典文学大系『今昔物語集』一（池上洵一 校注）……『過去現在因果経』卷第二・三。『釈迦譜』卷第一。部分的に『仏本行集経』卷第二十五を参酌。

ここで、乳糜供養譚の部分の出典をそれぞれの経典・仏書に当たり検証してみたい。まず、『経律異相』卷四では苦行から菩提樹下の瞑想に至るまでがきわめて簡潔に描かれ、乳糜供養の場面も

女聞天言。即取乳糜。盛滿金鉢。往尼連水邊。菩薩以神通力。入水洗欲。兜率天子。取天衣袈裟。奉上菩薩。即取著之。住尼連水邊。長者女奉乳糜。菩薩食之。氣力稍充。往詣佛樹。⁽³⁹⁾

とある。また『法苑珠林』卷第十一「食糜部 第五」では、まず『仏本行集経』卷第二十五を引いて菩薩が「善生

村主二女」のもとに往き二女から供養された乳糜を食してその器である「金鉢」を河に擲ち菩提樹に向かうまでの描写があるが、乳糜の材料とした牛乳の説明が加わり「経律異相」より詳しい。さらに「法苑珠林」は「住持感応記」を引いて同じ場面を描くが、ここでは乳糜供養は「受二女乳糜。至菩提樹下欲昇金剛壇」とあるのみで、きわめて簡略である。また「釈迦譜」は、「住尼連水。長者女奉乳糜稽首足下。菩薩受食知氣充。」と「経律異相」に近い表現である。そして、「経律異相」「法苑珠林」「釈迦譜」いずれにも「女」の名は出ない。「仏祖統記」は十三世紀の成立で、「今昔」以降の書であるが、その巻第二には「時彼林外有二牧牛女。名難陀婆羅。」また割注に「按本行経。善生村主二女。一名難陀。一名婆羅。」とある。

一方、『過去現在因果経』巻第三の当該箇所には、以下のように説かれている。

爾時太子。調伏阿羅邏迦蘭二仙人已。即便前進迦闍山苦行林中。是憍陳如等五人所止住處。即於尼連禪河側。靜坐思惟。觀衆生根。宜應六年苦行。而以度之。思惟是已。便修苦行。於是諸天。奉獻麻米。太子爲求正眞道故。淨心守戒。日食一麻一米。設有乞者。亦以施之。

爾時憍陳如等五人。既見太子。端坐思惟。修於苦行。或日食一麻。或日食一米。或復二日。乃至七日。食一米。時憍陳如等。亦修苦行。供奉太子。不離其側。

(中略)

爾時太子。心自念言。我今日食一麻一米。乃至七日食一麻米。身形消瘦。有若枯木。修於苦行。垂滿六年。不得解脫。故知非道。不如昔在閻浮樹下。所思惟法。離欲寂靜。是最眞正。今我若復以此羸身。而取道者。彼諸外道。當言自餓是般涅槃因。我今雖復節節有那羅延力。亦不以此而取道果。我當受食然後成道。作是念已。即從坐起。至尼連禪河。入水洗浴。洗浴既畢。身體羸瘠。不能自出。天神來下。爲按樹枝。得攀出池。時彼林外。有一牧牛女人。名難陀婆羅。時淨居天。來下勸言。太子今者在於林中。汝可供養。女人聞已。心大歡喜。于時地中。自然而生千葉蓮花。花上有乳糜。女人見此。生奇特心。即取乳糜。至太子所。頭面禮足。而以奉上。太

『今昔物語集』 仏伝説話の一齣

——「スジャーター」から「ナンダハラ」へ——

鈴 木 治 子

一、はじめに

仏伝の成道をめぐる印象的な一場面に、釈尊が苦行で衰えた体力を牧牛女の捧げた乳粥（乳糜）で回復させ、菩提樹下の瞑想に入るくだりがある。そして、その乳粥を供養した娘の名は、今日「スジャーター」として広く喧伝されている。ところが、『今昔物語集』をはじめとする我が国の仏伝説話では、「難陀波羅（なんだはら）」の名でこの娘が登場する。

本稿では、パーリ文、梵文、漢訳の諸仏伝および我が国の仏伝文学の中に描かれた乳糜供養説話の諸相をたどり、二つの名が生じた背景と、『今昔物語集』巻第一第五「悉達太子、於山苦行語」の原話を追究することを目的とする。

二、「スジャーター」 伝承のひろがり

法頭がインド巡拝を綴った『法頭伝』の「伽耶城」の場面に次の記述がある。

又北行二里得彌家女奉佛乳糜處。從此北行二里。佛於一大樹下石上東向坐食糜。樹石今悉在。石可廣長六尺高

二尺許。(傍線筆者、以下同じ)

これによると法頭の渡印した五世紀には、牧牛女の乳糜供養の場所、および菩薩がその乳糜を坐して食したところが残っていたという。

また、『大唐西域記』卷第八「摩揭陀国 上」には次のような一節がある。

菩提樹垣外西南牽堵波。奉乳糜二牧女故宅。其側牽堵波。牧女於此煮糜。次此牽堵波如來受糜處也。³⁾
すなわち、七世紀の玄奘の時代にもこの話は喧伝されたのであろう。この記述から、乳糜を奉った処のみならず、

「二牧女故宅」までが仏跡として扱われていたことが知られる。ただ、これらには牧牛女の名は語られていない。

右の二書に記された牧牛女の伝承はきわめて息が長い。中村元著『ゴータマ・ブッダ I』(一九六九年初版)

にも「ネーランジャラー河を渡ったところに、スジャーター女の家跡と称するものがある」と記されているが、⁴⁾

二〇〇四年三月に筆者が当地を訪れた折も、釈尊成道の地ブダガヤの大塔前にはスジャーターの石像が置かれ、金剛宝座から見て尼連禪河(ネーランジャラー河)の対岸に位置するセーナ村には、現在でもこの話が伝承されていた。土地の人々は伝承を持つばかりでなく、スジャーターの家と称する遺跡を守っていた。しかし、人々が語る名は「スジャーター」だけであって、「ナンダハラ」の名を知る者はいなかった。

この説話は、多くの經典・仏伝に認められる。本来、仏伝は阿含經典や律藏に断片的に描かれ、やがて伝記をまとめることを本旨とした仏伝經典が登場したとされる。この牧牛女話は、古くは『雜阿含經』卷第二十三に登場する。この經の当該箇所は時間軸にそって仏伝を記したのではなく、阿育王建立の仏塔を巡りながらそこにゆかりあるのエピソードを描く体裁を取っている。牧牛女話は

此處二女奉菩薩乳糜如偈所說

大聖於此中受二女乳糜

從此而起去 往詣菩提樹

と描かれているが、ここにも女の名は示されていない。

さて、「スジャーター」の名が見られる文献に、まずパアリ語ジャータカ所収の『ニダーナ・カタール』（因縁の物語）がある。その乳糜供養譚は次のように始まる。

そのころ、ウルヴェーラーのセーナーニ聚落に、地主セーナーニーの家に生まれたスジャーターという年ごろの娘がおり、一本のニグロダ樹に祈願をかけた。「もし、わたしが同じ階級の家に〔嫁いで〕行って、最初のおなかに男の子が授かりましたら、毎年十万〔金〕を出してあなたにお供えをいたしましょう」と。かの女はその祈願はかなった。（偉大な人）が難行を行なつて満六年たつたヴィサーカ月の満月の日のことだったが、かの女は供養祭をしようと思ひ立ち、まず千頭の牝牛をラッティマドウカの森に追ひ、その乳を五百頭の牝牛に飲ませた。そして、そ（の五百頭）の乳を二百五十頭に〔飲ませる〕というふうにして、ついには十六頭の牝牛の乳を八頭の牝牛に飲ませ、乳の濃さと甘さと栄養分とを多くしようとして、（乳の回転）ということを行つた。かの女は、ヴィサーカ月の満月の日に、朝早く、「供養祭をしましょう」と、夜明けとともに起き出し、かの八頭の牝牛の乳をしばらくとした。べつに子牛が牝牛の乳房のしたへ行つたわけではなかったが、乳房のしたに新しい容器を差し入れると、たちまち、ひとりでに乳がほとばしり出てきた。その不思議さを見て、スジャーターは自分の手で乳を取つて新しい容器に入れ、手ずから火をおこして煮はじめた。

このように、詳細をきわめた物語が展開している。右の話に続き、スジャーターは「ミルクがゆ」に「滋養食」を入れ、「黄金の鉢」に盛つてボーデイサッタの手の上に載せる、と語られる。さらに続いて、

ボーデイサッタは坐つていた場所から立ちあがると、木のまわりを右へとまわつて、鉢をたずさえて、ネーランジャラー河の岸辺に行かれた―数千のボーデイサッタたちがさとりをひらかれる日におりて行つて沐浴する場所は、スツパティッティタ沐浴場というのであるが―その岸辺に鉢を置いて、おりて行つて沐浴し、数十万の仏たちの衣服である（聖者の標章）を身にまとい、東方に向かつて坐られた。そして、煮つめられた蜜入

りのミルクがゆを、ターラ樹のひとつだねの実ほどの大きさの四十九個の団子にして、残らず食べられた。かれは仏となって七週間（さとり座）で過ぎされたのであるが、それが、まさしく四十九日の食物なのである。（中略）

ところで、そのミルクがゆを食べおわると、黄金の鉢を手にし、「もし、わたしが今日仏となることができらば、この鉢は流れに逆らって行け。もし、できないのなら、流れに従って行け」と言って投げられた。と乳糜供養話は結ばれる。このように、阿含經典とは異なり、独立した仏伝には成道前話が豊かな物語性を付与され詳細に語られている。

次に梵文の仏伝を見てみよう。律藏から発展したとされる『マハー・ヴァストウ』には、前世に菩薩の母であったスジャーターがウルヴィルヴァーで乳粥を供養する話が載る。同じく梵文の仏伝である『ラリタ・ヴィスタラ』では、ウルヴィルヴァーのナンディカ村の村長の十人の若い娘が菩薩に奉仕し、その一人スジャーターは

千頭の雌牛から乳を搾り、それから七回繰り返して、最も純粹なクリームを取り出し、ついでこのクリームと最も新鮮な最も新しい米とを、新しい焼物の壺に注ぎ入れ、新しい竈の上に置いて、料理を作った。（中略）村長の娘スジャーターは蜂蜜入りの乳粥を黄金の鉢に満たして菩薩に捧げた（中略）。

この賢いスジャーターは食べ物で黄金の器に入れて捧げ、かのボサツの足を頂いて礼拝してから、喜びに満ちてボサツに向かって言った。私のためにどうかこの食べ物をお食べください、おお、衆生の御者であられます方よ。

必要なだけこの食べ物を食べられた後で、この賢者は器を水の中に投げ入れられた。^①とあり、『ニダーナ・カタール』とはまた異なった伝承を詳細に記している。

次に漢訳經典では、『ラリタ・ヴィスタラ』を原典とする仏伝經典『普曜經』卷第五に「時修舍慢加村落長者女。與諸梵志奉美乳糜。」^②さらに偈の中で「修舍女奉食 金鉢盛乳糜」^③とあり、スジャーターの音写として「修

舎女」の名が用いられている。

また、律にも「須闍陀」の名は登場する。『五分律』巻第十五には、

起到鬱鞞羅羅斯那聚落入村乞食。次到斯那婆羅門舎。於門外默然立。彼女須闍陀。見佛威相殊妙。前取佛鉢盛満美食以奉世尊。佛受食已語前。汝可歸依佛歸依法。即受二自歸。是爲女人中須闍陀最初受二自歸爲優婆夷。佛食已復還菩提樹下。結跏趺坐三昧七日受解脫樂。¹¹⁾

の一節が見える。ただ、ここでは、菩提樹下の成道前の乳糜供養の話ではなく、成道の後七日経て鬱鞞羅羅斯那聚落で世尊が村の娘「須闍陀」より美食を供養され、娘に二自帰を授け優婆夷とさせる話である。

さらに、『マハー・ヴァストゥ』と同系の一異本の訳とされる『仏本行集経』巻第二十四にも「須闍多」の名が登場する。

到一村主長者之家。然其長者。名難提迦^{隋言}至彼家已。却立一面。默然而住。其難提迦。自喜村主有一善女。

名須闍多^{善生}彼女端正。可喜無雙。爲諸世人之所樂見。其善生女遙見菩薩手持瓦器默然立住欲乞求食。善生見

已。從其二乳。自然汁出。時善生女。問菩薩言。最勝仁者。仁是誰子。是何種姓。名字云何。父母何處。今欲何求。仁者云何。有何神異。今我一見。使我兩乳汁自然流¹²⁾

しかし、この一節も乳糜供養譚ではなく、乞食に訪れた菩薩の姿を見て「須闍多（善生）」の乳より自然に乳汁が流れたという話である。ただここでは、スジャーターの音訳「須闍多」と意訳「善生」の双方を用いていることが注目される。『仏本行集経』では、巻第二十五に「善生村主の二女」による乳糜供養譚が語られているが、これについては次章で言及したい。

また、乳糜供養譚にスジャーターの意識の「善生」の名が現われるのは、『ラリタ・ヴィスタラ』の漢訳で『普曜経』の異訳とされる『方广大莊嚴経』である。

時善生女即以三金鉢盛満乳糜。持以奉獻菩薩受已作是思惟。食此乳糜必定得成阿耨多羅三藐三菩提。

復告「善生」。我若食已如「是金鉢當付與誰」。善生女言。願以此鉢奉「上尊者隨意所用」。

このように、「スジャーター」／須闍多（須闍陀）／善生の名は、「ニダーナ・カタール」をはじめとするパーリ仏伝・梵文仏伝ばかりでなく、漢訳仏伝經典等にも数例認められた。しかも、乳糜供養譚ではなく成道前後の別の説話として「須闍多」の登場する異伝のあることも確認された。

三、「スジャーター」から「ナンダハラ」へ

さて、牧牛女の名称は、前述した「スジャーター」（須闍多）の他に「ナンダハラ（ナンダバラ）」（難陀婆羅）と伝承された例がある。

まず、先述した『ラリタ・ヴィスタラ』では、乳糜供養の主体はスジャーターとするが、共に菩薩への奉仕者として登場するウルヴィルヴァー村の村長の十人の娘の最初に「バラ」の名が出る⁽¹⁸⁾。また、二世紀に馬鳴の著した『ブッダ・チャリタ』には牛飼いの長の娘としてナンダバラが登場し、その漢訳である『仏所行讚』卷第三には時彼山林側 有二牧牛長 長女名「難陀」 淨居天來告 菩薩在林中 汝應往供養 難陀婆羅闍 歡喜到其所 手貫白珂釧 身服青染衣 青白相映發 如水淨沈漫 信心增踊躍 稽首菩薩足 敬奉香乳糜 惟垂哀愍受 菩薩受而食⁽²⁰⁾。

「難陀」および「難陀婆羅闍」と出る。そして代表的な仏伝經典である『過去現在因果經』卷第三には「有一牧牛女人。名難陀波羅」とある。

この他に、乳糜供養の主人公の女を二人とする伝承もある。まず、『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷第二十には「於難陀難陀力二牧牛女所。食十六倍上妙乳糜」と二人の女が登場する。同じく、『仏本行集經』卷第二十五「精進苦行品 第二十九下」には「軍將斯那耶那婆羅門家」の二人の娘として「難陀⁽²¹⁾」「婆羅⁽²²⁾」の名が見える。

ところが、この箇所では乳糜供養譚は語られず、二女が菩薩の身に酥油を塗り、羊乳を供養する話となっている。ただ、これに続く「向菩提樹品 第三十上」には、「善生村主二女」による乳糜供養譚が語られる。さらに、同經典卷第四十では、成道後の遊行説法の場面にも「兵將大婆羅門」の二女として「難陀」「波羅」の二人の名が見える。このように、この経には多様な名が登場し、まさに経の集成としての性格を示している。

また、チベット系の仏伝『衆許摩訶帝経』巻第六では、女の名が「難那」「難那末羅」となっている。⁽²⁶⁾ この他、本生經典にも「難陀」「難陀波羅」の二女が登場する。『出曜経』巻第十四には、

復次菩薩從苦行起。難陀難陀波羅二女。以蘇麻油塗菩薩身。諸女天身極自柔軟狀如天女。⁽²⁷⁾
とあり、『中本起経』巻上では

梵志二女。長名難陀。次名難陀波羅。見光喜悅。尋詣佛所。禮拜請佛。如來昇堂。教授二女。歸命三尊。授五戒已。⁽²⁸⁾

と、いずれも二人として扱うが、前者は「蘇麻油」を菩薩の身体に塗る話が描かれ、後者は二人が積尊から受戒する話であり、ここにも乳糜供養の話題はない。

一方、「難陀婆（波）羅」の意識である「歡喜」「歡喜力」等の名称を用いている經典もある。『仏本行経』巻第三には

至他閑處。於是便受喜悅喜力二女乳糜。甘露之施。即便行詣微妙道樹。

と、「喜悅」「喜力」と意識した名で二女が登場する。また、説一切有部系の『根本説一切有部毘奈耶』⁽³⁰⁾巻第十八では「歡喜」「喜力」の二人が、さらに同『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』⁽³¹⁾巻第一、同巻第八、「根本説一切有部毘奈耶出家事」⁽³²⁾巻第二、「根本説一切有部毘奈耶破僧事」⁽³³⁾巻第五では、「歡喜」「歡喜力」が登場する。中でも、きわめて詳細な仏伝を収めている『破僧事』では、次のようにこの説話が詳述されている。

菩薩爾時。漸加飲食身力強健。即往西那延村唐言會軍村也。彼有村主。名爲軍將。將有二女。一名歡喜。二名歡喜力。時此二女先聞。雪山南傍涼伽河側。劫比羅仙住處不遠。劫比羅城釋迦種中生一太子。端正具足衆相圓滿。一切衆生見者喜悅。相師占云。此兒若紹王位當得轉輪王。此女聞已。於十二年中常守貞潔。人間常法。若有女人。能守貞潔滿十二年者。即合與轉輪王爲妃。故彼二女。於十二年內不犯十惡。滿十二年訖作是思念。我今於十二年中作清淨行訖。應以十六轉乳粥供養苦行仙人。所謂十六轉者。一千牛乳飲一千牛。復以一千飲五百。復以五百飲五百。復以五百飲二百五十。復以二百五十飲二百五十。復以二百五十飲一百二十五。復以一百二十五飲一百二十五。復以一百二十五飲六十四。復以六十四飲六十四。復以六十四飲三十二。復以三十二飲三十二。復以三十二飲十六。復以十六飲十六。復以十六飲八。復以八飲八。復以八飲四。作是念已。即取此乳頗瓊器中煮爲粥。

このようにして煮た上質の乳粥を「歡喜」「歡喜力」の二女は、梵天・淨居天・帝釈天の勧めによつて、体力を消耗した菩薩に施すのである。

當煮之時。淨居諸天。觀見菩薩食此粥已即成菩提道。我等應當助其威力。即將上藥速得力者。置乳器中并衛護之。當時粥現種種輪相。時有一外道。名曰近行。來見此粥有種種相。作是念云。食此粥者必證無上智慧。我應乞取喫之。念已便去。粥既熟已。時彼外道却來告二女曰。我從遠來甚大飢乏。今此乳粥可分施我。二女報曰。我不與汝。默然而去。時二女人。從頗瓊器中。瀉其乳粥於寶鉢中。天帝釋來立二女前。梵天淨居天等以此遙立。時彼二女。既見帝釋在前而立。即捧其乳鉢施與帝釋。帝釋報曰。施勝我者。二女問曰。今誰勝汝。答曰。彼梵天王。爾時二女。復持其乳鉢施梵天王。梵天王報曰。施勝我者。問曰。誰勝於汝。答曰。彼淨居天。時此女人。復以乳鉢捧淨居天。淨居天報曰。施勝我者。又復問曰。誰勝於汝。答曰。彼菩薩今見在尼連禪河洗浴。爲無力故不能得出。彼人勝我。汝當施與。時二女人。即持其乳粥往尼連禪河。將施菩薩。爾時河岸有女樹神。見菩薩虛羸不能上岸。即從樹出半身展手欲接菩薩。菩薩問曰。汝是何身。樹神答曰。我是女人。菩薩報曰。我不能觸

汝。可爲我低一樹枝。我欲攀出。時彼樹神即低樹枝。菩薩攀而得出。便著衣服在於河岸樹下而坐。時二女人便持粥至。曲躬恭敬奉施菩薩。菩薩以自他利故。便受其粥。又便問曰。兼此寶器總能施不。二女答曰。聖者。今總奉施。菩薩爾時即喫其粥。洗其寶鉢擲尼連河中。⁽³⁶⁾

ここでは、釈尊の出自から説き起こし、二女が「十六轉」の乳粥を供養する必然性をはじめ、千頭分の牛の乳を濃縮した「十六轉」の乳の意味を具体的に説明する。続いて「近行」という外道が乳粥の意味を説く。次に、帝釈天・淨居天・梵天が登場し、それらの諸天を超えて勝れた存在である菩薩に乳粥供養を勧める。このように、本經では乳糜供養譚のもつとも増幅した変容が認められる。

有部系の律で広汎な仏伝を描いたのが『破僧事』であるとする、一方、仏伝經典で多様な伝承を詳細に描いているのは、先述した『仏本行集經』である。例えば、ここにも『破僧事』の「十六轉乳粥」と近似した「十六分妙好乳糜」を作る過程が詳述されている。⁽³⁷⁾

以上を整理すると、阿含經典には牧牛女の名は語られないが、『ニダーナ・カター』等のパリー仏伝、『マハー・ヴァストウ』『フリタ・ヴィスタラ』等の梵文の仏伝では「スジャーター」、その漢訳の『普曜經』には「修舍女」、『五分律』所収の仏伝には乳糜供養でなく食事の供養譚の中に「須闍多」が登場する。また漢訳仏伝には、スジャーターの訳語の「善生」、「善生村主二女」などの表現も見られた。

また、『フリタ・ヴィスタラ』には、村主の十人の娘の一人として「バラ」が見え、そして『ブツダ・チャリタ』には、初めて「ナンダバラ」の名が登場する。漢訳仏伝ではそれが「難陀婆（波）羅」と表記され、さらに「難陀」「婆羅」の二人として描く例も認められた。加えてその訳語の「歓喜」「歓喜力」など、さまざまな呼称が見られた。

これらの名が、乳糜供養譚でなく、菩薩の成道前後の供養譚に登場する経もあった。そして、『仏本行集經』のように「善生」を女の住む村の名として扱うものや、『四分律』のように「蘇闍羅」を女の父の名として出す例も

あり、きわめて錯雑した伝承過程を示している。

ただ、説一切有部系の律ではとくにこの説話を詳述する傾向があり、例外なく「歓喜」「歓喜力（喜力）」の名で二女を登場させている。

次に、「須闍多」と「難陀婆（波）羅」の先後関係を考えたい。諸々の伝経經典成立の先後関係はいまだに決定しない難しい問題であるが、パーリ文・梵文の伝やその漢訳にある「スジャーター」「須闍多」の呼称が先行すると考えられる。その根拠として、次のような仮説が立てられる。それは、「須闍多」が乳糜を奉る場面、あるいはそれを思い立つ場面で、「歓喜の心」を発すという表現が諸書に見られる点である。たとえば、『ニダーナ・カタ』では、ボーディサッタが供養を受けようとしているという報告を下女から聞いてスジャーターは「喜び満足し」とある。したがって、その「歓喜」の語が固有名詞化し、さらに『ラリタ・ヴィスタラ』に登場する善生村の十人の娘の一人「バラ」の伝承が混入し、娘の名がナンダバラ（歓喜）となる異伝が成立したと推測されよう。

四、『今昔物語集』における乳糜供養譚

我が国に現存する完結した最古の伝は『今昔物語集』天竺部所収の説話群であるが、乳糜供養譚はその巻第一第五話の後半に次のように描かれている。

太子、又迦蘭仙ノ苦行ノ所ニ至給フ。橋陳如等ノ五人ノ栖也。其ヨリ尼連禪河ノ側ニ至給テ、坐禪修習シテ苦行シ給フ。或日ハ一麻ヲ食シ、或日ハ一米ヲ食シ、或ハ一日乃至七日ニ一ノ麻米ヲ食ス。橋陳如等又苦行ヲ修シ、太子ヲ供養シ奉テ其ノ側ヲ不離ズ。太子思懐、「我レ苦行ヲ修シテ既ニ六年ニ満又。未ダ道ヲ不得ズ。若シ此ノ苦行ニ身羸レテ命ヲ亡シテ道ヲ不得ハ、諸ノ外道ハ、餓テ死タルト云ベシ。然レバ、只食ヲ受テ道ヲ可成」ト思シテ、座ヨリ立テ尼連禪河ニ至リ給フ。水ニ入テ洗浴シ給フ。洗浴畢テ身羸レ瘡給テ陸ニ不登得給

ズ。天神来テ、樹ノ枝ニ乗セ奉テ登セ奉リツ。其河ニ大ナル樹有リ、頰離那ト云フ。其ノ樹ニ神有リ、柯俱婆ト名ツク。神、瓔珞莊嚴セル臂ヲ以テ太子ヲ引迎ヘ奉ル。太子樹神ノ手ヲ取テ河ヲ渡給ヌ。太子彼ノ麻米ヲ食給ヒ畢テ、金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ菩提樹ニ向給ヒヌ。

彼ノ林ノ中ニ、老人ノ秣牛ノ女有リ。難陀波羅ト云フ。淨居天来テ勸メテ云ク、「太子此ノ林ノ中ニ来給ヌ。汝子供養シ奉ベシ」ト。女此ヲ聞テ喜ブ。其時ニ、池ノ中ニ自然ラ千葉ノ蓮花生タリ。其ノ上ニ乳ノ麻米有リ。女此ヲ見テ奇特也ト思テ、即チ此ノ麻米ヲ取テ、太子ノ所ニ至テ礼拝シテ此ヲ奉ル。太子女ノ施ヲ受給テ、身ノ光リ・氣力滿給ヌ。五人ノ比丘此ヲ見テ驚キ怪テ、「我等ハ此ノ施ヲ受テハ苦行退転シナム」ト云テ、各本所ニ返。太子一人ハ其ヨリ畢波羅樹下ニ趣キ給ヒニケリトナム語り傳ヘタルトヤ。

この箇所の出典・同話・類話を先学の主要諸註釈は次のように指摘する。

① 日本古典文学大系『今昔物語集』一（山田孝雄 他校注）……『過去現在因果経』卷第三。異伝は『法苑珠林』卷第十一・『経律異相』卷第二。

② 講談社学術文庫『今昔物語集』（二）（国東文麿 訳注）……『過去現在因果経』卷第二・三。『仏祖統記』卷第二。『法苑珠林』卷第十一。『経律異相』卷四。

③ 新日本古典文学大系『今昔物語集』一（池上洵一 校注）……『過去現在因果経』卷第二・三。『釈迦譜』卷第一。部分的に『仏本行集経』卷第二十五を参酌。

ここで、乳糜供養譚の部分の出典をそれぞれの經典・仏書に当たり検証してみたい。まず、『経律異相』卷四では苦行から菩提樹下の瞑想に至るまでがきわめて簡潔に描かれ、乳糜供養の場面も

女聞天言。即取乳糜。盛滿金鉢。往尼連水邊。菩薩以神通力。入水洗欲。兜率天子。取天衣袈裟。奉上菩薩。即取著之。住尼連水邊。長者女奉乳糜。菩薩食之。氣力稍充。往詣佛樹。³⁹⁾

とある。また『法苑珠林』卷第十一「食糜部 第五」では、まず『仏本行集経』卷第二十五を引いて菩薩が「善生

村主二女」のもとに往き二女から供養された乳糜を食してその器である「金鉢」を河に擲ち菩提樹に向かうまでの描写があるが、乳糜の材料とした牛乳の説明が加わり「経律異相」より詳しい。さらに「法苑珠林」は「住持感応記」を引いて同じ場面を描くが、ここでは乳糜供養は「受二女乳糜。至菩提樹下欲昇金剛壇」とあるのみで、きわめて簡略である。また「釈迦譜」は、「住尼連水。長者女奉乳糜稽首足下。菩薩受食知氣充。」と「経律異相」に近い表現である。そして、「経律異相」「法苑珠林」「釈迦譜」いずれにも「女」の名は出ない。「仏祖統記」は十三世紀の成立で、「今昔」以降の書であるが、その巻第二には「時彼林外有二牧牛女。名難陀婆羅。」また割注に「按本行経。善生村主二女。一名難陀。一名婆羅。」とある。

一方、『過去現在因果経』巻第三の当該箇所には、以下のように説かれている。

爾時太子。調伏阿羅邏迦蘭二仙人已。即便前進迦闍山苦行林中。是憍陳如等五人所止住處。即於尼連禪河側。靜坐思惟。觀衆生根。宜應六年苦行。而以度之。思惟是已。便修苦行。於是諸天。奉獻麻米。太子爲求正眞道故。淨心守戒。日食一麻一米。設有乞者。亦以施之。

爾時憍陳如等五人。既見太子。端坐思惟。修於苦行。或日食一麻。或日食一米。或復二日。乃至七日。食一米。時憍陳如等。亦修苦行。供奉太子。不離其側。

(中略)

爾時太子。心自念言。我今日食一麻一米。乃至七日食一麻米。身形消瘦。有若枯木。修於苦行。垂滿六年。不得解脫。故知非道。不如昔在閻浮樹下。所思惟法。離欲寂靜。是最眞正。今我若復以此羸身。而取道者。彼諸外道。當言自餓是般涅槃因。我今雖復節節有那羅延力。亦不以此而取道果。我當受食然後成道。作是念已。即從坐起。至尼連禪河。入水洗浴。洗浴既畢。身體羸瘠。不能自出。天神來下。爲按樹枝。得攀出池。時彼林外。有一牧牛女人。名難陀婆羅。時淨居天。來下勸言。太子今者在於林中。汝可供養。女人聞已。心大歡喜。于時地中。自然而生千葉蓮花。花上有乳糜。女人見此。生奇特心。即取乳糜。至太子所。頭面禮足。而以奉上。太

子即便受彼女施。而呪願之。今所施食。欲令食者。得充氣力。當使施家得臆得喜。安樂無病。終保年壽。智慧具足。太子卽復作如是言。我爲成熟一切衆生故。受此食。呪願訖已。卽受食之。身體光悅。氣力充足。堪受菩提。

爾時五人。既見此事。驚而怪之。謂爲退轉。各還所住。菩薩獨行。趣畢波羅樹。自發願言。坐彼樹下。我道不成。要終不起。

この展開を見ると、苦行林での橋陳如等との苦行、六年後の苦行の放棄、尼連禪河での洗浴、牧牛女難陀波羅の乳糜供養、橋陳如等五人の同行からの軽蔑、菩提樹下への独行、となつており『今昔』の内容がこれに近似していることがわかる。ただし、『今昔』の傍線部の内容だけは、『因果経』には求められない。それは、次に引く『仏本行集経』巻第二十五に見出せる。

爾時彼處尼連禪河。以諸末香種種衆花彌滿水上。合雜而流。是時菩薩。於彼水中。既澡浴已。取其袈裟。於水中濯出振曬乾。著於體上。欲渡彼水。波流湍疾。身體羸羸。不能得越。兼復六年精勤苦行。身力劣弱。不能得濟彼河之岸。

爾時彼河有一大樹名頽誰那隋言今者彼樹之神。名柯俱婆隋言小峯住依彼樹。時彼樹神。以諸瓔珞莊嚴之臂。引向菩薩是時菩薩。執樹神手。得渡彼河。菩薩所浴河内香水。一切諸天。各各分取。將還宮殿。以此功德吉祥水故。將灑自宮。

爾時彼河尼連禪主。有一龍女。名尼連茶耶隋言不棄從地踊出。手執莊嚴天妙宝提。奉獻菩薩。菩薩受已。卽坐其上。坐其上已。取彼善生村主之女所獻乳糜。如意飽食。悉皆淨盡。菩薩既食彼乳糜已。緣過去世行檀福報業力熏故。身體相好。平復如舊。端正可喜。圓滿具足。無有缺減。

爾時菩薩。食彼糜訖。以金鉢器。棄擲河中。時海龍王。生大希有奇特之心。復爲菩薩難現世故。執彼金器。擬欲供養。將向自宮。是時天主釋提桓因。卽化其身。作金翅鳥金剛寶嘴。從海龍邊。奪取金鉢。向忉利宮三十三

天。恒自供養。於今彼處三十三天立節。名爲供養菩薩金鉢器節。從彼已來。至今不斷

爾時菩薩。食糜已訖。從坐而起。安庠漸漸向菩提樹。彼之筌提其龍王女。還自收攝。將歸自宮。爲供養故而有偈說

菩薩如法食乳糜 是彼善生女所獻

食訖歡喜向道樹 決定欲證取菩提⑤

このように、右の『仏本行集經』の傍線部と『今昔』の傍線部とを比較すると、これが出典であることは疑いえない。したがって、『今昔』の乳糜供養譚の出典は、③で池上が指摘するように、『過去現在因果經』および『仏本行集經』と考えることが妥当である。

さて、『今昔』本文は、このように二つの經に出典を求めたため問題が生じている。それはまず、傍線部の末尾の「太子、彼ノ麻米ヲ食給ヒ畢テ、金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ菩提樹ニ向給ヒヌ。」にある「彼ノ麻米」の指示内容が曖昧な点である。『今昔』本文に即して読むなら、「麻米」はその前の部分にある苦行時に食べた「麻米」を指すはずだが、それでは「金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ」の意味が唐突で汲み取れない。しかも「金ノ鉢」は当然乳糜の入れ物という了解があった。そこで、「麻米」は「乳糜」の「糜」の文字を分解した表記という無理な解釈が必要になるわけである。この矛盾は、『今昔』が『仏本行集經』の乳糜供養の記述を省略して作話した結果だといえる。『仏本行集經』では『因果經』とは逆に、洗浴の場面の前にすでに「善生村主女」による乳糜供養の話が置かれている。ゆえに「以金鉢器。棄擲河中。」の文言はなんら無理がない。しかし、『今昔』では『仏本行集經』の流れを汲み取らず一節だけを用いたために齟齬が生じたのである。また、『今昔』では、

苦行↓尼連禪河で洗浴↓「麻米」を食す↓菩提樹に向かう

と展開したあとに、ふたたび牧牛女難陀波羅の「乳ノ麻米」供養の話が続き、最後に「畢波羅樹」に向かう記述が繰り返さされる。たしかに、ここでは『因果經』に則って「菩提樹」でなく音写語の「畢波羅樹」が用いられ、言

業としての重複は避けられているものの内容上の不自然さは否めない。

では、このように時系列を崩し内容を重複させ、錯綜した表現にしてまで、中間部にだけ『仏本行集経』を用いた理由は何であろうか。それは、苦行に疲れた太子を尼連禰河から樹神が岸に引き上げる場面が、もつとも詳述されているのが『仏本行集経』だからだと考えられる。『今昔』に登場する樹神「頰離那」「柯俱婆」の名が出るのもこの経のみである。

『今昔』の仏伝説話には、多くの人名、人格化された動植物・神・魔等の固有名が登場する。仏の出生から成道に至るまでの各話を見ると、釈尊周辺の人物はいうまでもなく、物語の筋にさして関わらない者の名まで出していることがわかる。たとえば、巻第一第二話で、誕生した釈迦に水を注ぎかける竜王「難陀」「跋難陀」、誕生直後に浄飯王とともに釈迦が礼拝する天神「増長」、そのとき釈迦を拝する女天神「無畏」。また同第六話で、菩提樹下の成道の坐に敷く草を授ける帝釈天の化身「吉祥」、成道を妨げる魔王の子「薩陀」、魔王の女（むすめ）「染欲」「能悦人」「可愛樂」、魔の姉妹「弥伽」「迦利」、空中の魔「員多」などである。このように、説話の脇役に至るまで固有名を仏典から掬い取って示すのが『今昔』の仏伝説話のひとつの特徴である。

したがって、乳糜供養譚でも、この部分を詳述し樹神の名「頰離那」「柯俱婆」を出すために『仏本行集経』を部分的に用いたことが考えられる。ところが『仏本行集経』の当該箇所では、乳糜供養の主人公が「善生村主之女」とあるだけで名は出ない。そのうえ、記述が詳細で錯綜している。それゆえ、この話の大枠は、構成が整い主人公の「難陀波羅」の名が明示されている『因果経』に求めたのであろう。

五、『今昔』以降の仏伝に現われた乳糜供養譚

我が国の古典文学には『今昔』以外に仏伝を詳述した作品はきわめて少ない。しかし、いくつかの仏伝の中にこ

の話を見出すことができる。

まず、保延六年（一一四〇）の識語をもつ『金澤文庫本佛説話集』の末尾に簡略な仏伝がある。この部分は破損がひどく解説するには限界があるものの、「年正月八日^レ受^レ難陀^一」「女之乳^一」「持^テ石鉢沐浴^シ尼連河^ニ」¹⁷という文字が確認できる。よつて、乳糜を供養した女の名として、「難陀波（婆）羅」が描かれていたと推測できる。

さらに、中世の仏伝で乳糜供養譚を描くものは、管見の限りでは、華蔵寺蔵『釈迦如来八相次第』と龍谷大学蔵『釈迦八相』の二種である。

完結した純然たる最古の仏伝である『釈迦如来八相次第』（華蔵寺蔵）は、天文二十一年（一五五二）に書写され、康応元年（一三八九）の年号が奥書に示るされている。この書の中巻の冒頭には、次のように詳細な乳糜供養話が展開されている。

善生村ノ主、兵將婆羅門ト云者アリ。七珍万宝豊ナル大福長者也。提波婆羅門、善生村ニ行テ、兵將長者ニ合テ語テ曰ク、淨飯王ノ太子、六年ノ苦行ニ疲テ、優留頻羅聚落ニ臥玉ヘリ。仏ニ成リ玉ハンコト既ニ近付ケリ。然ニ定テ、魔障ヲナサンコト疑ナシ。我レ、身ヲ勞リテ力付テ、魔王ヲ降伏セハヤト仰セアル由ヲ語ル。兵將長者ニ二人ノ娘アリ。一ヲハ難陀ト名ケ、ニヲハ波羅ト名ク。（中略）太子ノ御身ノ疲レ有シヲハ、難陀・波羅ト云二人ノ童女、菓湯ヲ浴セ奉リ、御身ノ垢ヲスリ、蘇蜜ヲ御身ニ塗奉リシカハ、速二本ノ如ク、御身モナヨリ、御力モ付玉ヘリ。（中略）兵將婆羅門ノ二人ノ女、（中略）自ラ煮テ、月ノ十五日ニ悉達太子ヲ、父ノ婆羅門ノ家ヘ請奉テ、新キ金ノ鉢ニ盛テ、太子ノ御前ニ備ヘタリ。太子、此十六分ノ乳糜ヲ服シ玉イシカハ、八万四千ノ毛^{（マユ）}吼ヨリ金色ノ光ヲ放テ、十方世界ヲ照シ、八万四千ノ毛孔ヨリ牛頭栴檀ノ香ヲ出ス。サレハ此粥ヲ法身成就ノ粥ト名ク。此粥ヲ表シテ、正月十五日ニハ粥ヲ煮ルコト未代マテタヘス。其粥ヲカイタル杖ヲ牛王杖ト名ク。是ヲ以テ、善キ子ヲ孕^マト打、幸アレト打、病アル者ヲハ病癒ヨト打、樹木ノ実^{（ミ）}ノナラヌヲハ実ナ

レトウツ。(中略)サテ、太子ハ善生村ヲ立テ、菩提樹下ニ詣シ玉ウ。⁽⁴⁸⁾

ここには、「兵将婆羅門」の娘「難陀」と「波羅」が釈尊へ乳糜を供養する前に、蘇蜜を御身に塗る話が語られ、また乳糜を作った乳が、千頭の牛の乳を飲んだ五百頭の牛の乳を三百頭の牛に飲ませ、さらにそれを百頭に飲ませ、という乳を濃縮する過程が詳述される。ただしこの話題は『今昔』にはない。これは、『仏本行集経』に、軍将斯那耶那婆羅門の娘「難陀」「婆羅」より受けた「油酥」を釈迦が身に塗り、また善生村主の娘より千頭の乳を最後に十五頭の乳に濃縮して煮た「上乳糜」を受ける、とある記述に類似するため、この流れを汲んでいると考えられる。また、『仏本行集経』より簡略であるが、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』にも牛乳濃縮の過程の描写がある。

また、建武四年(一一三三七)の奥書、文永十年(一一七三)の本奥書をもつ仏伝、龍谷大学蔵本『釈迦八相』は、次のように書かれている。

トキニ太子、成道ノ期イタリテオホスヤウ、ワレイマ金剛兪定ヲオコサムトオモフニ、モシコノ定ニテオコサハ、外道ノ儀ニコトナラス。皮膚^{ヒツ}円満シテオコサメ、トテ乳ノカユラクワハ、ヤ、トオホシメスニ、淨居天子キタリテ、牧牛女名難陀波羅^{モクマニヨ}ニツケテイフヤウ、悉達太子乳ノカユラモトム。乳ノカユヲツクリテタテマツレト。牧牛女ヨロコヒテ、千ノ牛ノ乳ヲシホリテ、五百ノ牛ニノマセテ、ヤカテ五百ノ牛ノ乳ヲシホリテ、二百五十の牛ニノマセ、カヤウニシタイニシテ、タ、フタツノ牛ニノマセテ、シホリテ乳ノカユヲツクリテ、金ノハチニモリテタテマツリタレハ、メシテノチ、金ノハチヲ尼連禪河ニナケ入給ヒタレハ(後略)⁽⁴⁹⁾

ここにも、「難陀波羅」が登場し、牛乳濃縮の話題を含めた乳糜供養譚が綴られている。

最後に、歌謡における乳糜供養譚を探ってみた。仏伝を描いた歌謡は『梁塵秘抄』法文歌および『四座講式』およびそれに付随する数編の和讃などごく限られている。それらの中で、乳糜供養が描かれたものは管見のかぎりでは「成道讃」一例である。

今ノ尺迦モ哀ニシテ 昔ノ仏ノ迹ヲ追ヒ 牧牛ノ粥ヲ受ケ給ヒ 尼連禪河ニ沐浴シ 吉祥草ヲ座ニ敷キテ 結

跏趺座シ給ヒキ（後略）⁵⁰

本和讃では、このように乳糜供養は詠われるが、女の名は登場しない。

六、おわりに

釈尊成道説話で描かれる乳糜供養の話は、数々の經典に描かれ、仏伝の一齣の物語として定着していた。

その主人公の娘の名も、「須闍多」その意識の「善生」、「難陀婆（波）羅」、「難陀」、「婆（波）羅」の二女、などの例が見られた。また、「善生」は物語の舞台となった村の名称として出る経もあった。仏伝經典の前後関係を決めることは難しいが、パーリ文・梵文の仏伝や律蔵の仏伝に見える「須闍多」の名称が、「難陀婆（波）羅」に先行すると推測される。また『仏本行集経』は、乳糜を供養する女を「善生村主女」とするが、その他の場面には「須闍多」、「難陀」、「婆羅」などさまざまな名を登場させ、経の雑纂としての面影を留めていることがわかった。

このように漢訳經典では、「須闍多」、「難陀婆羅」の登場する話は「乳糜供養譚」に限らずさまざまな展開をみせていることが確認できた。しかし、我が国の仏伝文学では、乳糜供養譚をおさめているものは限られ、主人公の女の名を留めるものは『今昔物語集』の他数例にすぎない。しかも、いずれも「難陀婆羅」または「難陀」、「波羅」の二女として描かれている。

したがって、今日喧伝されている「須闍多」（スジャーター）の名は、我が国の古典には受容されなかったと思われる。今後、近世唱導作品等の未開拓な分野における「乳糜供養譚」の解明が待たれるが、この名が伝わったのは、パーリ本や梵本の仏伝が和訳され紹介された、近代以降のことであると考えられる。

（大正大学講師）

〔注〕

- (1) 諸經典における仏伝のエピソードについての先学の研究には、中村元『ゴータマ・ブッダ Ⅰ・Ⅱ』（旧版一九六八年、新版一九九二年）、外菌幸一「仏伝經典の形成過程について」（『鹿兒島経大論集』第二四卷第三号、一九八三年一〇月）、岩井昌悟・森章司・本沢綱夫「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』三、中央学術研究所モノグラフ篇、第三号、資料集篇Ⅱ、二〇〇〇年九月）
- (2) 『大正蔵』第五一卷八六三頁 a
- (3) 『大正蔵』第五一卷九一七頁 b
- (4) 中村元『ゴータマ・ブッダ Ⅰ』（中村元選集〔決定版〕第11卷）二七一頁
- (5) 外菌幸一「仏伝經典の形成過程について」（『鹿兒島経大論集』第二四卷第三号、一九八三年一〇月）五〇頁
- (6) 『大正蔵』第二卷一六七頁 a
- (7) 中村元監修・補注『ジャータカ全集 1』七八〜七九頁
- (8) 同、八〇〜八一頁
- (9) 外菌 前掲論文 五〇頁
- (10) J.J. JONES 訳『THE MAHĀVASTU』VOLUME II (205) 195〜196頁
- (11) 溝口史郎訳『ブッダの境涯』二四一〜二四四頁
- (12) 『大正蔵』第三卷五二二頁 a
- (13) 『大正蔵』第三卷五二二頁 b
- (14) 『大正蔵』第二二卷一〇三頁 b。この部分は『釈氏要覽』卷上（『大正蔵』第五四卷二七一頁 a）にも引かれる。また、『四分律』卷第三二（『大正蔵』第二二卷七八六頁 a）には、釈迦成道後の托鉢の場面に「鬘鞞羅村」で「蘇闍羅大將女」が世尊の姿を見て、「歡喜心を發」し食を施す話がある。
- (15) 『大正蔵』第三卷七六五頁 a、b
- (16) 『パーリ語仏教辭典』の「sujāta」の項には「生まれよき、善生の、善生」とある。
- (17) 『大正蔵』第三卷五八三頁 c
- (18) 溝口史郎訳『ブッダの境涯』二三九頁

- (19) 『ブツダチャリタ』(梶山雄一郎訳『原始仏教』第一〇卷 一九八五年十二月) 一四二頁
- (20) 『大正蔵』第四卷二四頁c
- (21) 『大正蔵』第三卷六三九頁b
- (22) 『大正蔵』第二四卷二九九頁c
- (23) 『大正蔵』第三卷七七〇頁b
- (24) 『大正蔵』第三卷七七二頁b
- (25) 『大正蔵』第三卷八三八頁c
- (26) 『大正蔵』第三卷九四九頁b
- (27) 『大正蔵』第四卷六八六頁b
- (28) 『大正蔵』第四卷一四九頁c
- (29) 『大正蔵』第四卷七五頁b
- (30) 『大正蔵』第三卷七一七頁a
- (31) 『大正蔵』第三卷九一一頁a
- (32) 『大正蔵』第三卷九八一頁b
- (33) 『大正蔵』第三卷一〇二六頁c
- (34) 『大正蔵』第三卷一一一頁c
- (35) 『大正蔵』第三卷一一一頁c
- (36) 『大正蔵』第三卷一一一頁c
- (37) この呼称は他に「六倍乳糜」とするものもある。
- (38) 新日本古典文学大系三三『今昔物語集 一』二四頁〜二六頁。ルビは省略した。
- (39) 『大正蔵』第五三卷一七頁a
- (40) 『大正蔵』第五三卷三六七頁a
- (41) 『大正蔵』第五三卷三六七頁a〜三六八頁b。『法苑珠林』本文には「仏本行經云」とあるが、実際には『仏本行經』には該当する文言はなく、『仏本行集經』卷第二五(『大正蔵』第三卷七七二頁b〜七七三頁b)からの引用である。

- (42) 『大正蔵』第五〇卷七頁c
(43) 『大正蔵』第四九卷一四五頁b
(44) 『大正蔵』第三卷六三八頁b、六三九頁b
(45) 『大正蔵』第三卷七七二頁a、b
(46) 経では「頰離那」は樹神ではなく、樹の名として出る。
(47) 山内洋一編著『金沢文庫本 仏教説話集の研究』（一九九七年一月）二五一頁
(48) 『中世仏伝集』（『真福寺善本叢刊』第五卷、二〇〇〇年十一月）三八一〜三八三頁
(49) 同、四四九頁下段
(50) 『統日本歌謡集成』卷一 中古編（一九八〇年九月再版）一四七頁

天。恒自供養。於今彼處三十三天立節。名爲供養菩薩金鉢器節。從彼已來。至今不斷

爾時菩薩。食糜已訖。從坐而起。安庠漸漸向菩提樹。彼之筌提其龍王女。還自收攝。將歸自宮。爲供養故而有偈說

菩薩如法食乳糜 是彼善生女所獻

食訖歡喜向道樹 決定欲證取菩提⑤

このように、右の『仏本行集經』の傍線部と『今昔』の傍線部とを比較すると、これが出典であることは疑いえない。したがって、『今昔』の乳糜供養譚の出典は、③で池上が指摘するように、『過去現在因果經』および『仏本行集經』と考えることが妥当である。

さて、『今昔』本文は、このように二つの經に出典を求めたため問題が生じている。それはまず、傍線部の末尾の「太子、彼ノ麻米ヲ食給ヒ畢テ、金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ菩提樹ニ向給ヒヌ。」にある「彼ノ麻米」の指示内容が曖昧な点である。『今昔』本文に即して読むなら、「麻米」はその前の部分にある苦行時に食べた「麻米」を指すはずだが、それでは「金ノ鉢ヲ河ノ中ニ投入レテ」の意味が唐突で汲み取れない。しかも「金ノ鉢」は当然乳糜の入れ物という了解があった。そこで、「麻米」は「乳糜」の「糜」の文字を分解した表記という無理な解釈が必要になるわけである。この矛盾は、『今昔』が『仏本行集經』の乳糜供養の記述を省略して作話した結果だといえる。『仏本行集經』では『因果經』とは逆に、洗浴の場面の前にすでに「善生村主女」による乳糜供養の話が置かれている。ゆえに「以金鉢器。棄擲河中。」の文言はなんら無理がない。しかし、『今昔』では『仏本行集經』の流れを汲み取らず一節だけを用いたために齟齬が生じたのである。また、『今昔』では、

苦行↓尼連禪河で洗浴↓「麻米」を食す↓菩提樹に向かう

と展開したあとに、ふたたび牧牛女難陀波羅の「乳ノ麻米」供養の話が続き、最後に「畢波羅樹」に向かう記述が繰り返さされる。たしかに、ここでは『因果經』に則って「菩提樹」でなく音写語の「畢波羅樹」が用いられ、言

業としての重複は避けられているものの内容上の不自然さは否めない。

では、このように時系列を崩し内容を重複させ、錯綜した表現にしてまで、中間部にだけ『仏本行集経』を用いた理由は何であろうか。それは、苦行に疲れた太子を尼連禰河から樹神が岸に引き上げる場面が、もつとも詳述されているのが『仏本行集経』だからだと考えられる。『今昔』に登場する樹神「頰離那」「柯俱婆」の名が出るのもこの経のみである。

『今昔』の仏伝説話には、多くの人名、人格化された動植物・神・魔等の固有名が登場する。仏の出生から成道に至るまでの各話を見ると、釈尊周辺の人物はいうまでもなく、物語の筋にさして関わらない者の名まで出していることがわかる。たとえば、巻第一第二話で、誕生した釈迦に水を注ぎかける竜王「難陀」「跋難陀」、誕生直後に浄飯王とともに釈迦が礼拝する天神「増長」、そのとき釈迦を拝する女天神「無畏」。また同第六話で、菩提樹下の成道の坐に敷く草を授ける帝釈天の化身「吉祥」、成道を妨げる魔王の子「薩陀」、魔王の女（むすめ）「染欲」「能悦人」「可愛樂」、魔の姉妹「弥伽」「迦利」、空中の魔「員多」などである。このように、説話の脇役に至るまで固有名を仏典から掬い取って示すのが『今昔』の仏伝説話のひとつの特徴である。

したがって、乳糜供養譚でも、この部分を詳述し樹神の名「頰離那」「柯俱婆」を出すために『仏本行集経』を部分的に用いたことが考えられる。ところが『仏本行集経』の当該箇所では、乳糜供養の主人公が「善生村主之女」とあるだけで名は出ない。そのうえ、記述が詳細で錯綜している。それゆえ、この話の大枠は、構成が整い主人公の「難陀波羅」の名が明示されている『因果経』に求めたのであろう。

五、『今昔』以降の仏伝に現われた乳糜供養譚

我が国の古典文学には『今昔』以外に仏伝を詳述した作品はきわめて少ない。しかし、いくつかの仏伝の中にこ

の話を見出すことができる。

まず、保延六年（一一四〇）の識語をもつ『金澤文庫本佛説話集』の末尾に簡略な仏伝がある。この部分は破損がひどく解説するには限界があるものの、「年正月八日^レ受^レ難陀^一」「女之乳^一」「持^テ石鉢沐浴^シ尼連河^ニ」¹⁷という文字が確認できる。よつて、乳糜を供養した女の名として、「難陀波（婆）羅」が描かれていたと推測できる。

さらに、中世の仏伝で乳糜供養譚を描くものは、管見の限りでは、華藏寺蔵『釈迦如来八相次第』と龍谷大学蔵『釈迦八相』の二種である。

完結した純然たる最古の仏伝である『釈迦如来八相次第』（華藏寺蔵）は、天文二十一年（一五五二）に書写され、康応元年（一三八九）の年号が奥書に示るされている。この書の中巻の冒頭には、次のように詳細な乳糜供養話が展開されている。

善生村ノ主、兵將婆羅門ト云者アリ。七珍万宝豊ナル大福長者也。提波婆羅門、善生村ニ行テ、兵將長者ニ合テ語テ曰ク、淨飯王ノ太子、六年ノ苦行ニ疲テ、優留頻羅聚落ニ臥玉ヘリ。仏ニ成リ玉ハンコト既ニ近付ケリ。然ニ定テ、魔障ヲナサンコト疑ナシ。我レ、身ヲ勞リテ力付テ、魔王ヲ降伏セハヤト仰セアル由ヲ語ル。兵將長者ニ二人ノ娘アリ。一ヲハ難陀ト名ケ、ニヲハ波羅ト名ク。（中略）太子ノ御身ノ疲レ有シヲハ、難陀・波羅ト云二人ノ童女、菓湯ヲ浴セ奉リ、御身ノ垢ヲスリ、蘇蜜ヲ御身ニ塗奉リシカハ、速ニ本ノ如ク、御身モナヨリ、御力モ付玉ヘリ。（中略）兵將婆羅門ノ二人ノ女、（中略）自ラ煮テ、月ノ十五日ニ悉達太子ヲ、父ノ婆羅門ノ家ヘ請奉テ、新キ金ノ鉢ニ盛テ、太子ノ御前ニ備ヘタリ。太子、此十六分ノ乳糜ヲ服シ玉イシカハ、八万四千ノ毛^{（マユ）}吼ヨリ金色ノ光ヲ放テ、十方世界ヲ照シ、八万四千ノ毛孔ヨリ牛頭栴檀ノ香ヲ出ス。サレハ此粥ヲ法身成就ノ粥ト名ク。此粥ヲ表シテ、正月十五日ニハ粥ヲ煮ルコト未代マテタヘス。其粥ヲカイタル杖ヲ牛王杖ト名ク。是ヲ以テ、善キ子ヲ孕^マト打、幸アレト打、病アル者ヲハ病癒ヨト打、樹木ノ実^{（ミ）}ノナラヌヲハ実ナ

レトウツ。(中略)サテ、太子ハ善生村ヲ立テ、菩提樹下ニ詣シ玉ウ。⁽⁴⁸⁾

ここには、「兵将婆羅門」の娘「難陀」と「波羅」が釈尊へ乳糜を供養する前に、蘇蜜を御身に塗る話が語られ、また乳糜を作った乳が、千頭の牛の乳を飲んだ五百頭の牛の乳を三百頭の牛に飲ませ、さらにそれを百頭に飲ませ、という乳を濃縮する過程が詳述される。ただしこの話題は『今昔』にはない。これは、『仏本行集経』に、軍将斯那耶那婆羅門の娘「難陀」「婆羅」より受けた「油酥」を釈迦が身に塗り、また善生村主の娘より千頭の乳を最後に十五頭の乳に濃縮して煮た「上乳糜」を受ける、とある記述に類似するため、この流れを汲んでいると考えられる。また、『仏本行集経』より簡略であるが、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』にも牛乳濃縮の過程の描写がある。

また、建武四年(一一三三七)の奥書、文永十年(一一七三)の本奥書をもつ仏伝、龍谷大学蔵本『釈迦八相』は、次のように書かれている。

トキニ太子、成道ノ期イタリテオホスヤウ、ワレイマ金剛兪定ヲオコサムトオモフニ、モシコノ定ニテオコサハ、外道ノ儀ニコトナラス。皮膚^{ヒツ}円満シテオコサメ、トテ乳ノカユラクワハ、ヤ、トオホシメスニ、淨居天子キタリテ、牧牛女名難陀波羅^{モクマニヨ}ニツケテイフヤウ、悉達太子乳ノカユラモトム。乳ノカユヲツクリテタテマツレト。牧牛女ヨロコヒテ、千ノ牛ノ乳ヲシホリテ、五百ノ牛ニノマセテ、ヤカテ五百ノ牛ノ乳ヲシホリテ、二百五十の牛ニノマセ、カヤウニシタイニシテ、タ、フタツノ牛ニノマセテ、シホリテ乳ノカユヲツクリテ、金ノハチニモリテタテマツリタレハ、メシテノチ、金ノハチヲ尼連禪河ニナケ入給ヒタレハ(後略)⁽⁴⁹⁾

ここにも、「難陀波羅」が登場し、牛乳濃縮の話題を含めた乳糜供養譚が綴られている。

最後に、歌謡における乳糜供養譚を探ってみた。仏伝を描いた歌謡は『梁塵秘抄』法文歌および『四座講式』およびそれに付随する数編の和讃などごく限られている。それらの中で、乳糜供養が描かれたものは管見のかぎりでは「成道讃」一例である。

今ノ尺迦モ哀ニシテ 昔ノ仏ノ迹ヲ追ヒ 牧牛ノ粥ヲ受ケ給ヒ 尼連禪河ニ沐浴シ 吉祥草ヲ座ニ敷キテ 結

跏趺座シ給ヒキ（後略）⁵⁰

本和讃では、このように乳糜供養は詠われるが、女の名は登場しない。

六、おわりに

釈尊成道説話で描かれる乳糜供養の話は、数々の經典に描かれ、仏伝の一齣の物語として定着していた。

その主人公の娘の名も、「須闍多」その意識の「善生」、「難陀婆（波）羅」、「難陀」、「婆（波）羅」の二女、などの例が見られた。また、「善生」は物語の舞台となった村の名称として出る経もあった。仏伝經典の前後関係を決めることは難しいが、パーリ文・梵文の仏伝や律蔵の仏伝に見える「須闍多」の名称が、「難陀婆（波）羅」に先行すると推測される。また『仏本行集経』は、乳糜を供養する女を「善生村主女」とするが、その他の場面には「須闍多」、「難陀」、「婆羅」などさまざまな名を登場させ、経の雑纂としての面影を留めていることがわかった。

このように漢訳經典では、「須闍多」、「難陀婆羅」の登場する話は「乳糜供養譚」に限らずさまざまな展開をみせていることが確認できた。しかし、我が国の仏伝文学では、乳糜供養譚をおさめているものは限られ、主人公の女の名を留めるものは『今昔物語集』の他数例にすぎない。しかも、いずれも「難陀婆羅」または「難陀」、「波羅」の二女として描かれている。

したがって、今日喧伝されている「須闍多」（スジャーター）の名は、我が国の古典には受容されなかったと思われる。今後、近世唱導作品等の未開拓な分野における「乳糜供養譚」の解明が待たれるが、この名が伝わったのは、パーリ本や梵本の仏伝が和訳され紹介された、近代以降のことであると考えられる。

（大正大学講師）

〔注〕

- (1) 諸經典における仏伝のエピソードについての先学の研究には、中村元『ゴータマ・ブッダ Ⅰ・Ⅱ』（旧版一九六八年、新版一九九二年）、外菌幸一「仏伝經典の形成過程について」（『鹿兒島経大論集』第二四卷第三号、一九八三年一〇月）、岩井昌悟・森章司・本沢綱夫「仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』三、中央学術研究所モノグラフ篇、第三号、資料集篇Ⅱ、二〇〇〇年九月）
- (2) 『大正蔵』第五一卷八六三頁 a
- (3) 『大正蔵』第五一卷九一七頁 b
- (4) 中村元『ゴータマ・ブッダ Ⅰ』（中村元選集〔決定版〕第11卷）二七一頁
- (5) 外菌幸一「仏伝經典の形成過程について」（『鹿兒島経大論集』第二四卷第三号、一九八三年一〇月）五〇頁
- (6) 『大正蔵』第二卷一六七頁 a
- (7) 中村元監修・補注『ジャータカ全集 1』七八〜七九頁
- (8) 同、八〇〜八一頁
- (9) 外菌 前掲論文 五〇頁
- (10) J.J. JONES 訳『THE MAHĀVASTU』VOLUME II (205) 195〜196頁
- (11) 溝口史郎訳『ブッダの境涯』二四一〜二四四頁
- (12) 『大正蔵』第三卷五二二頁 a
- (13) 『大正蔵』第三卷五二二頁 b
- (14) 『大正蔵』第二二卷一〇三頁 b。この部分は『釈氏要覽』卷上（『大正蔵』第五四卷二七一頁 a）にも引かれる。また、『四分律』卷第三二（『大正蔵』第二二卷七八六頁 a）には、釈迦成道後の托鉢の場面に「鬘鞞羅村」で「蘇闍羅大將女」が世尊の姿を見て、「歡喜心を發」し食を施す話がある。
- (15) 『大正蔵』第三卷七六五頁 a、b
- (16) 『パーリ語仏教辞典』の「sujata」の項には「生まれよき、善生の、善生」とある。
- (17) 『大正蔵』第三卷五八三頁 c
- (18) 溝口史郎訳『ブッダの境涯』二三九頁

- (19) 『ブツダチャリタ』(梶山雄一郎訳『原始仏教』第一〇卷 一九八五年十二月) 一四二頁
- (20) 『大正蔵』第四卷二四頁c
- (21) 『大正蔵』第三卷六三九頁b
- (22) 『大正蔵』第二四卷二九九頁c
- (23) 『大正蔵』第三卷七七〇頁b
- (24) 『大正蔵』第三卷七七二頁b
- (25) 『大正蔵』第三卷八三八頁c
- (26) 『大正蔵』第三卷九四九頁b
- (27) 『大正蔵』第四卷六八六頁b
- (28) 『大正蔵』第四卷一四九頁c
- (29) 『大正蔵』第四卷七五頁b
- (30) 『大正蔵』第三卷七一七頁a
- (31) 『大正蔵』第三卷九一一頁a
- (32) 『大正蔵』第三卷九八一頁b
- (33) 『大正蔵』第三卷一〇二六頁c
- (34) 『大正蔵』第三卷一一一頁c
- (35) 『大正蔵』第三卷一一一頁c
- (36) 『大正蔵』第三卷一二一頁c
- (37) この呼称は他に「六倍乳糜」とするものもある。
- (38) 新日本古典文学大系三三『今昔物語集 一』二四頁〜二六頁。ルビは省略した。
- (39) 『大正蔵』第五三卷一七頁a
- (40) 『大正蔵』第五三卷三六七頁a
- (41) 『大正蔵』第五三卷三六七頁a〜三六八頁b。『法苑珠林』本文には「仏本行経云」とあるが、実際には『仏本行経』には該当する文言はなく、『仏本行集経』巻第二五(『大正蔵』第三卷七七二頁b〜七七三頁b)からの引用である。

- (42) 『大正蔵』第五〇卷七頁c
(43) 『大正蔵』第四九卷一四五頁b
(44) 『大正蔵』第三卷六三八頁b、六三九頁b
(45) 『大正蔵』第三卷七七二頁a、b
(46) 経では「頰離那」は樹神ではなく、樹の名として出る。
(47) 山内洋一編著『金沢文庫本 仏教説話集の研究』（一九九七年一月）二五一頁
(48) 『中世仏伝集』（『真福寺善本叢刊』第五卷、二〇〇〇年十一月）三八一〜三八三頁
(49) 同、四四九頁下段
(50) 『統日本歌謡集成』卷一 中古編（一九八〇年九月再版）一四七頁